



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 514 回 ボールウォッチャーになってはいけない

2013.3.3

サッカーには、「ボールウォッチャー」(ball-watcher)という言葉がある。ボールばかりを目で追ってしまい、周りが見えていない状態のこと、あるいは、相手オフェンスやボールの動きに対応できず、「ボールをただ見ているだけ」の状態になってしまった選手を意味するようである。一般的にペナルティエリアの前でディフェンダーはいったんラインを崩して、マンマークに切り替えるのだが、相手のコーナーキックに対する予測がはずれたり、相手のクロスボールのタイミングが早いと、マークすべき選手を見失い、この状態になることが多い。結果、試合中にもかかわらず、ぼんやりとボールを見ているだけの状態になってしまう。ボールウォッチャーになりやすいのは、要するに、集中力が低下している時だと言われている。サッカーでは、ボールを目で追いかけることもさることながら、相手や周りの状況をよく見て自分がどう考え動くかが、より重要なのだろう。

いやはや、このボールウォッチャー、サッカーに限った話ではない。我々ビジネスや日常生活の世界で、往々にして見受けられる光景であり、ひよっとしたら自分自身も、ボールウォッチャーになっているかもしれないのである。

そう、ここで、一番の問題は、自分がボールウォッチャーであることに、本人自身気付いてない事である。サッカーはエキサイティングな観戦スポーツであり、見ている人はむしろ、分かり易いだろう。しかし日常的な動きの中では、著しく分かりにくいものかもしれない。

例えばこんな人…

スタッフが一丸となって結果を出そうとしている時、ひとり浮いている人がいる。

ベクトルが明確に決まったにも拘らず、動こうとしない人がいる。

「俺、聞いてないし、関係ないから…」口癖になっている人がいる。

疎(うと)い、鈍(にぶ)い、トロい、時流にのれない人は、ほとんどボールウォッチャー予備軍である。このボールウォッチャー候補生は、共通してアンテナがない、同じように感度が鈍い、スピーディな判断力がない、状況を読めない、意欲がないか自信過剰、自己中心的で協調性がない…、人事考課大好きな評論家の部長さんは、こんな分析をするだろうか、とにかくこの人がいるとそれだけで白けるし、チーム全体コケてしまう。なんとも残念極まりない人物であると言われてしまう。

自分が知らない間に、仲間からはそう見られ、見事にボールウォッチャーを演じているとしたら、あなたはそのチームに不要な人物になっている。

自分が知らない間につけられたその「レッテル」は、決して自分で剥がすことはできない。

真剣さを欠いた、ちょっとした集中力の欠如が、重い、大きなレッテルを貼ってしまうようだ。

ボールウォッチャーになってはいけない。